

親に見捨てられたけど、
無自覚チートで
街の人を笑顔にします

小さな大魔法使いの
自分探しの旅3

author

藤なごみ

★★★★

絵 駒木日々

フレア

『紅の剣士』という二つ名を持つ
凄腕の魔剣士。

モグちゃん

鉱山モグラという魔物の子ども。
レオによく懐いている。

登場人物紹介

チャーリー

クリスティーヌの祖父。
次期宰相と目されている。

クリスティーヌ

レオを兄のように慕う
フランソワーズ公爵家の令嬢。

シロちゃん

旅先で仲間になるスライム。
知能が高く、回復魔法が得意。

レオ

色々と不幸な境遇を背負う、
美少年主人公。
無自覚ながらチートな才能を持ち、
関わる人々を幸せにしている。

僕はレオ、黒髪が特徴の五歳の男の子です。

シエルフィード王国の端にある小さな村に住んでいたんだけど、両親の借金が原因で、村を訪れた商人に売られてしまった。

しかもその後、僕を乗せた馬車が盗賊のバラス一家に襲われて、絶体絶命の危機に。

そんな窮地だったけれど、魔法の力が覚醒かくせいしたことで盗賊たちを撃退した僕は、なんとかセルカーク直轄領の守備隊に保護してもらったのだった。

冒険者として必要な知識を守備隊から教わり、独り立ちできた頃、両親がセルカーク直轄領に護送されると聞き、僕はお隣のアマード子爵領に向けて旅を始めた。僕を売り飛ばしたことへのトラウマがまだ残っていて、顔を合わせられなかったからだ。

目的地に向かう途中で苦しんでいたところを助けた老人が、アマード子爵領の先代領主だったという偶然もあって、僕は子爵家にお世話になることになった。アマード子爵家はとてもいい人ばかりで、僕の境遇をわかってくれた上で色々な仕事を手配してくれた。

領内にある有名な工房で希少金属に魔力を込める新しいお仕事を始めたり、薬屋さんでポーション作りを行ったりと引っ張りだこだ。

悪徳貴族のゴルゴン男爵家が、ミスリルの剣欲しさに工房を襲撃したり、鉱山から素材を盗掘しようとして崩落を引き起こしたりするトラブルもあつたけど、守備隊とともに撃退できた。

それからはアマード子爵家で新年を迎え、あつという間に僕が領を発つ季節がやってきた。

僕は、行き先が同じということであつてきてくれることになつた、双子の冒険者のユリアさんとイリアさんと一緒に次なる目的地のコバルトブルーレイク直轄領を目指すのだった。

パカパカパカ。

アマード子爵領を出発した馬車は、トラブルに見舞われることもなく順調に進んでいた。

「プイ、プイ、プーイ！」

僕の相棒になつた鉱山モグラの子ども——モグちゃんが、楽しそうに手をバタバタさせながら外の景色を眺めていた。

モグちゃんは、アマード子爵領にいたときに、崩落した鉱山から助け出した魔物だ。保護した頃は、悪い貴族に無理矢理使役されて大怪我を負っていたけど、今ではその怪我也回復している。

ちなみにアマード子爵領からコバルトブルーレイク直轄領へは、馬車便で大体一週間くらいで着くらしい。

「この時期は天候の心配はしなくていいけど、周囲は警戒したほうがいいわ。コバルトブルーレイク直轄領に着く前あたりから、街道の周囲を森が覆つていて魔物や動物が出没しやすくなるか

らね」

一緒に馬車に乗っていたユリアさんがそう説明してくれた。

二人はとても面倒見がよく、アマード子爵領にいたときからとてもお世話になつている。

最初にいたセルカーク直轄領からアマード子爵領までは一人きりで旅していたので、知り合いが同行してくれるのはとても心強いな。

「そういえば数日前、アマード子爵領の兵たちが訓練を兼ねて街道を巡回していたな。お陰で、完全に進めて助かるな」

御者のおじさんがふと思ひ出したように話し出した。

きつとアマード子爵家が安全に旅ができるように配慮してくれたんだ。

離れてからも、僕のことを気にかけてくれて本当に優しいな。

こうして、馬車便は何事もなく進んでいった。

数日後、僕たちを乗せた馬車は別の領地に入った。

「この先を進むとアマード子爵領を抜けるわ。引き続き周囲の警戒は怠らないでね」

ユリアさんの言葉に、僕たちは全員で頷いた。

本当なら、僕たち以外にも屈強な冒険者が何人かいるから、僕たちだけが気を張る必要はないんだけど、今の冒険者たちには頼りにならない理由があつた。

「うえあおえ……」

なんと、おじさんたちがみんなして完全にグロッキー状態だったのだ。昨晩深酒して悪いお酒にあたってしまったらしい。

僕が回復魔法をかけても気分の悪さは完全に収まらなかつたようで、まだまだ辛そうにしていた。この状況で、戦力になつてもらうのはどうい無理だ。

だからなるべく何事もなく進みたかつたんだけど、そんなときに限ってトラブルは起こる。

シュイン、もわーん。

僕が発動していた探索魔法に反応があつた。

「あつ、前方の茂みに五頭くらい何かがあります！」

「おそらくオオカミの可能性が高いわね。戦闘準備をしましょう」

僕がそう言うと、すぐにイリアさんが指示を出した。

一応冒険者のおじさんの様子を窺つたけど……こつちはまだ顔色が悪かつた。

ガサガサ、ガサガサ、ガサツ。

「グルルル……」

茂みの中から五頭のオオカミが姿を現した。

オオカミはあばら骨が見えるくらい体が痩せていた。かなり飢えているのか、目はギンギンにぎらついている。

「レオ君、足止めをお願い！」

ユリアさんに言われて、僕はすぐに魔力を溜め始めた。

そして、オオカミ目がけて一気に魔法を放つ。

シュイン、バリバリバリ！

「ギャン！」

バタリ。

あ、あれ？

雷魔法のエリアスタンで痺れさせて動けなくさせようとするつもりが、オオカミは悲鳴をあげながら地面にバタリと倒れてしまった。

僕は目の前の状況に思わずポカーンとしちゃつたけど、ユリアさんとイリアさんはすぐに馬車を降りてオオカミにとどめを刺していた。

二人とも僕と違って冷静に対応しててすごいなあ。

そのまま、倒したオオカミの血抜きが始まつた。

僕はモグちゃんを連れて馬車から降りて、ユリアさんとイリアさんのところに向かつた。

二人が手際よくオオカミの血抜きをしながら、僕にもやり方を説明してくれる。

五頭のオオカミの血抜きを終えると僕の魔法袋にしまつてから、ユリアさんとイリアさんが穴を埋め戻す。

すると、小さくてプルプルした見た目の可愛い生き物が茂みの中からびよこびよここと十匹ほど現れた。

前に本で見たことあるけど、これってもしかして……

「ユリアさん、イリアさん。この小さな生き物ってスライムですか？」

「そうよ。色々なものを消化して分解してくれるから、通称森のお掃除屋さんなんて呼ばれているわ」

「きつと血抜き作業をしていたから、その臭いを嗅ぎつけて私たちのところに集まってきたのね」青色と緑色のスライムが、先ほどユリアさんたちが埋めた穴の周りに集まってもぞもぞと動いていた。

モグちゃんが興味深そうに、そのうちの一体のスライムをちょんちょんと突っついている。

そんな様子を可愛らしいなあと思つて見ていると、その中に一体他とは異なる個体を見つけた。

大きさは他のスライムの半分以上で、体の色も透き通った白。

なんとなく手のひらに乗せたけど、僕くらいの大きさの手でも収まってしまった。

とっても小さいなあ。

ユリアさんとイリアさんが、僕の手のひらに乗っているスライムを覗き込んでから、僕に向かって微笑んだ。

「これはカラースライムって言つて、とても珍しいスライムね」

「他のスライムよりも色が濃いだよ。それに見た目の違いだけじゃなくて、上手く成長すれば魔法を使えるようになるのも特徴よ」

普通のよりもすごいスライムなんだ。

手のひらに乗っている白色のスライムが僕の顔をじーっと見ている。

もしかして……

「ねえ、僕のお友達になつてくれる？」

僕が小さな白いスライムに話しかけると、スライムがふにふにと震えてからぺこぺこし始めました。さらに僕の手のひらから肩や頭にぴよんと飛び移り、それからモグちゃんの頭に移動します。

どうやら、僕の誘いを嬉しく思つてくれていたみたいです。

僕は小さなスライムに、体の色に合わせてシロちゃんって名前を付けた。

「プイ、プイ！」

「ふふ、新しいお友達が増えてモグちゃんもとっても喜んでるみたいね」

ユリアさんがモグちゃんとシロちゃんが仲良さそうにしているのを微笑ましく見ていた。

そんなシロちゃんだけど、実はとってもすごい能力を持っていた。

色々なものを吸収するたびにどんどんと強くなるらしいのだ。

みんながシロちゃんのことをすごいと褒めていて、僕もお友達が褒められてとっても嬉しくなりました。



オオカミを撃退したあとは、大きなトラブルもなく先へ進んでいきます。

そして、いくつかの停車場を通り、気づけばコバルトブルーレイク直轄領の手前までやってきた。途中で、三人の家族連れが乗ってきたあとは、僕と同じくらいの年の男の子がモグちゃんとシロちゃんに興味を示したみたいで、仲良さそうに話していました。

馬車に乗っている間は僕が探索魔法を使って周囲を警戒しているから、奇襲を受けることはありません。

森から飛び出してきた魔物たちは、拘束魔法で動けなくして確実に倒した。

「プイプイ」
時間があるときは、モグちゃんとシロちゃんはお互いに手と触手を繋いで魔力循環の訓練をしています。

モグちゃんの嬉しそうな反応を見る限り、シロちゃんはもうそろそろ魔法を使えるみたいです。そんな風にしばらくは順調に街道を進んでいたんだけど、昼食を食べ終えて再出発するとなったときにまたしても僕の探索魔法に反応があった。

僕はすぐにみんなに報告します。

「この先で、たくさんの反応が人を取り囲んでいます！」

「「なんだって!?!」」

冒険者のおじさんたちが僕の発言を聞いて目を丸くしました。そしてみんなで急いで準備を整えて、馬車に乗り込む。

反応があつたほうへ進んでいくと、魔物に襲われている馬車が見えた。

「「キシャー！」」

馬車を取り囲んでいるのは、ゴ布林という人型の魔物だった。

背は僕よりも少し大きいくらいで緑色の肌をしている。

たしか一匹一匹ならそんなに強くないけど、集団で襲つてくるととても厄介だと言われていたはずだ。今いるゴ布林の数は十匹以上で、少し多い。

「僕がバインドで、ゴ布林を拘束します！」

冒険者の皆さんに声をかけつつ、僕はすぐに魔法を発動した。

シユイン、シユイン、バシッ！

「「なっ!?」」

あつという間にすべてのゴ布林を拘束すると、それまでゴ布林たちと対峙していた冒険者がいつせいに僕を見て驚きの声をあげた。

また変なことをしちやつたかとい瞬思つたけど、これでゴ布林は自由に身動きできなくなったし、あとは確実に倒すだけだ。

冒険者たちもすぐにそれに気づいたようで、バインドで捕まえたゴ布林たちにトドメを刺して

いた。

ひと通りゴ布林を倒し終えると、冒険者たちが僕のもとに駆け寄って頭を撫で始める。

「いやあ、助かったぞ。噂には聞いたことがあつたが、まさか『黒髪の魔術師』がこんなところにいて、しかも俺たちを助けてくれるとはな」

「回復魔法も使いこなすし、本当にすごい魔法使いなんだな」

冒険者たちはみんな上機嫌で、僕を褒めてくれます。

あのままだと、ゴ布林との戦いで大怪我を負う人もいたかもしれないから、そうなる前に倒せてよかった。

ゴ布林の後始末は、ユリアさんたちが引き受けてくれました。

モグちゃんとシロちゃんも一緒に手伝いに行っています。

僕がユリアさんたちを待っていると、御者のおじさんが二人して腕を組みながら何か話し合っています。

「どうしたんですか？」

「いや、ちょっといつもよりゴ布林の現れる頻度が多いつて話をしていてな」

「何か異常が起きてるんじゃないのかって疑つてたところだったんだ。レオ、念のため周囲を確認してくれるか」

どうやらおじさんたちは魔物の襲撃に違和感を覚えているみたいだった。

たしかにこんなに頻繁^{ひんぱん}に出てくるのはおかしいよね。
僕はおじさんの言葉に一度頷^{うなづ}き、探索魔法を使った。
シュイン、もわーん。

あ、これはまずい！

すぐに危機が迫^{せま}つてることに気づき、僕は声をあげた。

「森から僕たちのほうに何かが近付^{ちか}ってきている反応があります！ 数は四十くらい！」

「はあ!?」

御者のおじさんたちだけでなく、ゴブリンを倒して一息ついていた冒険者のみんなも信じられないことを聞いたとばかりに衝撃を受けています。

でも、今は驚いてばかりじゃいられません。

なんとかこの反応からみんなを守らないと。

タイミングよくユリアさんたちが帰ってきたのを見つけて、僕はモグちゃんに指示を飛ばしました。

「モグちゃん、馬車の人たちを魔法障壁で守って！」

「プイ！」

モグちゃんが、馬車に乗り込んで二つの馬車を守るように魔法障壁を展開した。

モグちゃんの魔法障壁はとも丈夫だから、これで馬車にいる乗客は安全だ。

その間に、僕はいつでも魔法を放てるように魔力を溜める。

ガサガサ、ガサガサ。

「キシヤーー!!」

ほどなくして、茂みから多数のゴブリンが姿を現した。

ゴブリンは攻撃的で、僕たちを敵とみなしていた。

僕はその中にサイズが一際違うゴブリンの姿を見つける。

「人間の大人と同じくらいゴブリンがいるんですけど、あれはなんですか？」

「あれはゴブリンジェネラルだ。普通のゴブリンたちを束ねるリーダーみたいなやつで強さも通常のゴブリンとは比較にならない。あんなやつまでいるなんて、本当に何が起きてるんだ？」

たしかにゴブリンジェネラルと呼ばれる魔物は気性が荒そうで、手には棍棒^{こんぼう}を持っていて、かなり凶暴な見た目だった。

のんびりしていると、いつ馬車に危害が加えられてもおかしくない。

僕はそう思って、地面に手をついて一気に魔力を解放した。

シュイン、ザクザクザク！

僕が放ったのは、地面から複数の棘^{とげ}を突き出すアースニードルという魔法だ。

「ギャアー!!」

勢いよく飛び出た棘にゴブリンたちが次々に串刺しにされていく。

少しずつゴブリンの数が減っていき、やがてゴブリンジェネラルも含めてすべてのゴブリンを倒すことができた。

僕が「ふうっ」と額の汗を袖で拭^{ぬぐ}っていると、冒険者たちが啞然とした表情のまま馬車から降りてきました。

倒れたゴブリンを見下ろしながら、口を開く。

「おい、ゴブリンジェネラルなんていう強力な個体もいたのに、あの数のゴブリンを一撃で倒してたぞ？ あんなことできるものなのか？」

「いや、無理だろう。冒険者や軍が十人いても、この群れを倒せるかどうかだぞ……」

無事にゴブリンの群れを倒せてよかったと思ったんだけど、冒険者たちはどこか神妙な顔つきをしていた。

何かまずいことしちゃったかな。

そんなふうに思っていたら、僕たちのところに騎馬隊がやってきた。

騎馬隊は全部で五騎ほどいて、いずれも慌てた様子だ。

隊が僕たちの前に到着すると、息を切らしながら話し始めた。

「はあはあ、我々はコバルトブルーレイク直轄領の守備隊だ。領にやってきた馬車便の御者から、この周辺でゴブリンが大量に現れたという知らせを聞いて駆けつけたんだ」

「君たちは大丈夫……うお！　なんだ、このゴブリンの死骸の数は！　しかもゴブリンジェネラル

までいるぞ」

ユリアさんが僕たちを代表して、守備隊に應對してくれます。

「私たちとここにいる黒髪の魔術師と呼ばれるレオ君は襲われたのとは別の馬車に乗っていました。前の馬車に魔物が群がっているのを見つけて、退治を手伝ったんです」

ユリアさんに続いてユリアさんが説明を加えます。

「最初に現れたゴブリンは、レオ君に拘束魔法でサポートしてもらいながら冒険者で倒しました。その後ゴブリンジェネラル率いる大群が襲ってきましたが、そちらはレオ君が大規模魔法を放って、一発で倒しました」

「「えっ、この大群を魔法一発で!?!」」

守備隊員が衝撃を受けている。

えーっと、僕からも説明したほうがいいのだろうか。

僕が口を開こうとした矢先、茂みがガサガサと音を立てた。

冒険者と守備隊員の間緊張が走る。

「「グルルル……」」

現れたのは、複数のオオカミだった。

「ちっ、血の臭いを嗅ぎつけたか」

守備隊員の一人が少し慌てた様子だったが、このくらいの敵ならまったく問題ありません。

守備隊の人たちにも、説明するより見てもらったほうが早いしね。

シユイン、バシッ、バシッ！

「「ギャン！」」

先ほどのゴ布林たちと同じように拘束魔法ですぐに捕らえました。

「「えっ!?」」

動けずにいるオオカミの群れを見て、守備隊員がまたしても驚きます。

ユリアさんとイリアさん、冒険者さんたちは何度か見て少し慣れたのか、拘束されているオオカミたちを平然とした様子で倒し始めました。シロちゃんが素早く血抜き作業に移ります。

僕は守備隊の人に近寄りました。

「えっと、こんな感じで魔法を放ちました」

「うん、わかった。君が、黒髪の魔術師って言われる所以ゆえんもね」

僕の言葉を聞いた守備隊員は、苦笑していました。

オオカミの後処理が済んだところで、守備隊員が状況整理を行います。

「私たちは、この森にゴブリンの巣がある可能性が高いと踏んでいる。というか、前までは予想の域だったが、ゴ布林ジェネラルまで現れたとなればほぼ間違いないだろう。オオカミをやたら街道沿いに近いと見かけられるようになったのも、彼らが生息地を追われたからだと思っている」

守備隊の話聞いて、これは放っておけないと思った。

僕以外のみんなも同じ気持ちだと思う。

というのも、明日も僕たちはしばらく森に囲まれた道を進むからだ。

今日と同じことがまた起きるのだけは避けたい。

守備隊の人たちもこのゴ布林の問題を早く片付けたいと思っていたようで、この先の村にいる冒険者と協力して巣を駆逐しようと考えているのだと話してくれた。

それから守備隊たちと途中まで一緒に行動することが決まった僕たちは馬車に揺られながら近くの村へ向かうことになった。

「普段は冒険者と守備隊が一緒に行動することはないけど、こういう緊急事態だと、冒険者が要請を受けて、手を貸すこともあるわ」

「でも、レオ君は最終兵器扱いね。まだ幼いレオ君に無理をさせるわけにはいかないもの。ここは、大人である私たちが話をまとめるから安心してね」

「はい、ありがとうございます」

馬車内で、ユリアさんとイリアさんがそう教えてくれた。

きっと僕が不安がっていると思つて、安心させようとしてくれたのだろう。

夕方になる少し前、僕たちを乗せた馬車便が今日泊まる村に到着した。

この村は街道警備を行う守備隊の拠点もあるため、村にしては規模が大きめだ。

守備隊員と再び合流すると、隊の一人が僕にお願い事してきた。

「レオ君、すまないが冒険者ギルドに行つて、ここに来るまでの道中で倒した魔物や動物を出してきてくれ。きちんと討伐証明になる部位が揃っているはずだから、見せればどんな魔物がいたかが伝わるはずだ」

「わかりました」

これはお願いされるまでもない話だった。魔法袋に入っている倒した動物や魔物はどこかのタイミングで提出しようと思つていた。きちんと査定してもらえるみたいだし、こちらとしてもありがたい。

「それから二つ目だが、すでに何名か、今回の事件の前に動物や魔物に襲われて怪我をした者がいてな。今は教会で手当てを受けている。すまないが、彼らの治療をしてくれないか」

「もちろんです！」

どうやら前から複数の馬車便が動物や魔物の襲撃にあつていて、怪我人も出ていたようだ。これは早く治してあげないと！

僕は強く頷いてから、ユリアさんたちと守備隊員の皆さんとともに行動を始めた。

まずは、冒険者ギルドだ。

ドサドサドサ。

「ん？ なんだこの量は！」

僕が魔法袋に入っていた大量の獲物を冒険者ギルドの卸担当の人の前に出すと、担当のおじさんが思わず固まつてしまった。

量だけでなく、その中にゴブリンジェネラルまでいるのだから目を疑いたくなるのも無理はない。おじさんの声につられて、ギルド内にはいた冒険者がわらわらと集まつてきた。

けど、ここで時間をかけるわけにはいかない。

「すみません。教会で治療の仕事があるので、この場はお願いしてもいいですか？」

「おう、街道の魔物の件だろ。大体の事情は聞いているからここは任せてくれ」

僕はおじさんにお辞儀をしてから、ユリアさんとイリアさん、そして守備隊員とともに教会に向かった。

教会に着いた僕がさつそく治療を始めようとすると、シスターさんが涙を浮かべながら僕のもとにやってきた。

「ああ、まさかこの村に『黒髪の天使様』が来られるなんて……」

ああ、いつの間にかそつちの二つ名も広がっていたんだね。

でも、今はそれを気にしている場合ではない。

ポーションなどで最低限の治療はされているとはいえ、骨折などの重傷者が多数いたのだ。

僕に治療を依頼したのも納得だ。

モグちゃんとシロちゃんに手伝ってもらいながら、僕たちは教会にいた人の治療を進めていく。なんとか全員の治療を終え、みんなが口々にお礼を言ってくれた。

だが、ホッと一息ついて立ち上がるうとした瞬間――

ふらふら、ふらー。

体に力が入らなくなり、僕は立ちくらみのような状態になってしまった。

「あ、あれ？ あれれ？」

そのまま体が言うことを聞かずに、ユリアさんにもたれかかってしまった。

モグちゃんとシロちゃんが、僕の様子を心配して近くに寄ってくる。

ユリアさんが僕の体を受け止めながら、困ったように言った。

「今日は魔法を連続で使って、かなり魔力を消費してるはずだからね。思った以上に疲れているのよ」

「治療も無事に終わったし、早く宿で休んだほうがいいわね」

ユリアさんの勧めに従って、僕たちは宿で休むことになった。

ちょうど馬車で一緒だった冒険者のおじさんが教会までやってきて、宿をとったことを教えてくれた。

ユリアさんとは、このあと守備隊との話し合いがあるとのことで別行動になり、僕はユリアさんと一緒に宿に向かった。

宿に到着した僕たちがひと足先に夕食を食べていると、守備隊との話を終えた面々が宿の食堂にやってきた。

「先に食べていてすみません」

僕の言葉に、ユリアさんが首を横に振った。

「レオ君は本当に頑張っていたのだから、気にしなくていいのよ」

冒険者のおじさんたちも、ユリアさんに同意するようにうんうんと頷いている。

守備隊の人たちが話を共有してくれることになり、僕はご飯を食べながら説明を聞き始めた。

「この村の森の中に、ゴブリンの巣があることがわかった。そのため、明日コバルトブルーレイク直轄領の町から守備隊の本体が来て討伐にあたる。場合によっては、みんなにもゴブリン討伐の手伝いをお願いすると思うが、レオはまだ幼いから森に入るわけにはいかない。町に残って、怪我人の治療を頼みたい」

「治療を行うものがあるだけでも、守備隊や冒険者が安心して討伐に向かえるってもんだ。よろしくな」

みんなの話を聞くと、ユリアさんや冒険者のおじさんたちが、僕に無理させないように色々交渉してくれていたみたいだ。

もし話し合いに僕が参加していたら、頑張ってゴブリンを倒しますって言っちゃうところだった。

イリアさんたちに話し合いを任せてよかったかもしれない。

その後も夕食を食べながら色々と話していたら、さらに他の冒険者たちが集まってきた。

そして、話題は今まで僕が他の領で何をしてきたかに移り、ものすごく盛り上がったのだった。

「はあ、魔法をたくさん使ったのもあるけど、いっぱいお喋りをしたから疲れちゃいました」

「プイ……」

自分たちが泊まる部屋に入ると、僕とモグちゃんは思わずベッドにダイブしちゃいました。

そんな僕たちの姿に、ユリアさんとイリアさんが思わず苦笑しています。

「今日はレオ君大活躍だったもんね。ゆっくり休むといいわ」

「何もなければ、明日にはコバルトブルーレイク領に入るわよ」

ユリアさんとイリアさんが、僕とモグちゃんの頭を優しく撫でながら教えてくれます。

撫でられていたのが気持ちよくて、僕はそのまま眠りに落ちました。

翌日、まだ夜が明けたばかりの時間だというのに大きな鐘の音が聞こえてきました。

カンカンカンカン、カンカンカンカン。

「うーん、むにゃむにゃ。うん？ えーつと、この音はなんだろう？」

「プイ？」

モグちゃんもとても大きな音だったので、目を覚ましちゃったみたいだ。

とりあえずこの状況をユリアさんたちにも伝えなきゃ。

僕は隣で寝ているユリアさんたちを起こそうと体を揺すりました。

ゆさゆさ、ゆさゆさ。

「ユリアさん、イリアさん、起きて起きて。大きな鐘の音がするよ」

「プイ、プイ！」

モグちゃんも一緒になって、イリアさんの体を揺すります。

しばらくして、二人が目を擦りながらむっくりとベッドから体を起こした。

「うーん……」

それから僕の顔を見て何があったのという表情をするユリアさんたち。

でも、大きな鐘の音に気づいた途端、それまでボケーツとしていた二人がとても焦り出しました。

「これって、緊急事態を知らせる鐘だわ！」

「何が起きたっていうの!？」

えっ、緊急事態？

僕が首を傾げるとほぼ同時に、部屋の外から冒険者のおじさんたちの少し慌てた声が聞こえてきた。

ドンドンドン。

「おい、起きろ！ ゴブリンの集団がこの村を襲撃にきやがった！」

「「えっ！」」

まさか、ゴブリンのほうからこっちに来るなんて、想定外だよ。

僕たちは思わず顔を見合わせてビックリしてしまった。

急いで服を着替えて、他の冒険者とともに宿の外に出る。

空はほんの少しだけ明るくなってきたけど、まだまだ薄暗い。

カンカンカンカン、カンカンカンカン。

鐘が絶え間なく鳴り響く中、守備隊員が教会に避難するように村の人たちに声をかけていた。

僕は、すぐに広範囲探索魔法を使い、状況を報告する。

「村の外に、とんでもない数の反応があります！」

「襲撃してきたゴブリンで間違いないだろう。この村の防壁は木造だからな。群れで押し寄せられたら、ぶち壊されるぞ！ 急いで村の入口へ向かおう」

冒険者のおじさんがそう言って走り出したので、僕たちはその後が続いた。

ほどなくして村の入口に到着すると、門の脇にある櫓やぐらから守備隊員がゴブリンを弓矢で攻撃しているのが見えた。

だが、ゴブリンの数がとても多く、あまり減っている感じがしない。

村を囲む防壁がミシミシと音を立てていて、今にも壊れそうだった。

「おい、助太刀に来たわ！」

「すまない、助かる」

ユリアさんが櫓に向かって声をかけると、矢を放っていた守備隊員が一瞬だけ僕たちを見て返事した。

櫓は門の左右に二つあったので、僕とユリアさんとイリアさん、冒険者のおじさんで片側に昇り、もう一つの櫓に他の冒険者に向かってもらった。

上まで昇り切ったところで、イリアさんが僕に指示を出す。

「レオ君、ここから広範囲魔法で門の前に集まっているゴブリンを攻撃してくれないかしら？」

イリアさんが指さしたほうを見ると、門の前にゴブリンが群がって防壁を壊そうとしていた。

あれをどうにかしないといけないな。

僕は魔力を溜めて、一気に解放する。

シュイン、シュイン、グオーン！

「「ギシャー！」」

発動したのは、エアープレッシュャーという広範囲魔法だ。

風の塊に押しつぶされたゴブリンの数が、一気に減っていく。

「す、すごい。これが黒髪の魔術師の魔法……」

「一発で、少なくとも百匹は倒したぞ……」

守備隊員が啞然とした表情をしていた。

ユリアさんとイリアさんは、僕の魔法を見てドヤ顔をしているよ。守備隊の一人がハッと我に返って、すぐに指示を出しました。

「門の前にスペースができたぞ。一気にゴブリンを押し返すぞ！」

「おー！」

数名の守備隊員だけ残して、僕たちは一気に櫓から降りた。

そして、防壁の門から勢いよく外に出る。

「ギャッギャー！」

まだゴブリンの数は多かったけど、僕たちもやる気十分です。

「僕が拘束魔法で、どんどんゴブリンを拘束していきます！」

みんなに向かつて僕は叫びました。

「レオ、やったれ！」

「冒険者に後れを取るなよ！」

守備隊の人たちが僕を応援してくれます。

シュイン、バシッ！

「ギャギャ？」

僕が次々にゴブリンを拘束すると、冒険者と守備隊員が競うようにゴブリンを倒していった。

そのうち僕も拘束魔法を放つのに慣れてきて、まとめて五匹のゴブリンを拘束できるようになった。

モグちゃんとシロちゃんも一緒になって戦ってくれていて、モグちゃんは土魔法のアースバレットで、シロちゃんは酸の弾でどんどんゴブリンを減らしていく。

僕たちがゴブリンに負けたら村が全滅しちゃうから、みんな一生懸命だ。

気づけば日が昇っていて、防壁の前にはたくさんさんのゴブリンの死骸が積み上がっていく。

「レオ君、気を付けてね。そろそろ、一番大きいのが来るはずよ」

ユリアさんが僕に声をかけると同時に、僕たちの目の前にとても大きなゴブリンが五匹現れた。

そのうちの三匹は昨日も倒したゴブリンジェネラルだったけど、残りの二匹はゴブリンジェネラルよりもさらに体が大きく筋肉ムキムキだった。

「グオオオオオー！」

「ちっ、ゴブリンキングが二匹も現れたか。厄介だな」

あれがゴブリンキングか。

ゴブリンキングは、多くのゴブリンが倒されているのを見たからか、怒り出した。

そこで、イリアさんが僕に声をかける。

「レオ君、もう一回広範囲魔法を放てるかしら？ ゴブリンキングに集中するためになるべく他の敵を減らしたいから」

僕はイリアさんの言葉に頷き、魔力を溜めてから一気に解放した。

シュイン、バリバリバリ！

「ギンシャーー！！」

強力なエリアスタンの光が周囲を包み、魔法がやむとゴブリンとゴブリンジェネラルはプスプスと焦げ臭い臭いをさせながらいつせいに地面に倒れた。

「グオオオオオーー！！」

しかし、ゴブリンキングは肌が少し焦げただけで、それほど効いている様子はなかった。

シュツ、バキ、バキ！

そして、ゴブリンキングはその巨体から想像できないスピードで次々と守備隊の人と冒険者を殴ったり蹴り飛ばしたりしていく。

「がはっ……！！」

みんなが苦しむ声が聞こえてきた。

ああ、このままではたくさんの怪我人が出てしまう。

僕がどうしようか悩んでいると、モグちゃんとシロちゃんがすごい活躍を見せ始めた。

「プーー！！」

シュイン、バシッ！

「ガアアアア！！」

モグちゃんが、渾身の魔力を使った拘束魔法でなんとゴブリンキングを拘束したのだ。

ゴブリンキングが動けなくなった時間は一瞬だったけど、その隙を突いてシロちゃんがゴブリンキングの目を狙って酸の弾を放った。

ピュツ、ピュツ、ピュツ、ジュー！

「ギヤアアアア！！」

酸の弾は上手いことゴブリンキングの目に当たり、ゴブリンキングは顔を手で押さえて苦しんだ。

僕も負けていられないと、残り少なくなった魔力を一気に圧縮して放つ。

「えーい、いけー！！」

シュイン、シュイン、ザシュ！

魔力をできるだけ圧縮したことでもなんでも切れるようにしたエアーカーターを、僕はゴブリンキング目にかけて放った。

エアーカーターはゴブリンキングの顔を覆っている手や腕、そして首を切り裂いた。

ゴブリンキングが、首から大量の血を吹き出しながら大きな音を立ててうつ伏せに倒れる。

警戒を解かずに、そのまま僕は探索魔法を使って周囲を確認した。

「ふう、周りにはもう敵っぽい反応はないです」

「レオ君、ありがとう。しかし、これだけのことがあったからな。念のため周囲の警戒を続け

るぞ」

守備隊の偉い人が守備隊員に発破をかけ、周囲の警戒と倒したゴブリンの回収作業に取りかかった。

僕は一緒に頑張ったモグちゃんとシロちゃんをギュッと抱きしめた。

「ただ、そのとき――」

「ふらふら、ふらー。」

「あれあれ、あれ？」

「プイ!?」

僕は足の力が抜けるような感覚に陥ってしまい、そのままモグちゃんに抱きつく形で地面にぺたりと座り込んでしまった。

これは昨日と同じ症状かも。

僕を心配して慌てて駆けつけてきたユリアさんとイリアさんに、僕は「たはは」と苦笑いで返した。

守備隊の人と冒険者が僕にニコリと笑いかけて頷いた。

「勝じきをあげろ！ ゴブリンを討ち破ったぞ！」

「『おーー！』」

「プイー！」

モグちゃんとシロちゃんも、元気よく手をあげていた。

でも、僕はここで休んでいる暇はない。

このゴブリンとの戦いで、多くの人が怪我をしていたからだ。

僕は、ごそごそと魔法袋を漁ってあるものを取り出した。

「ユリアさん、イリアさん、僕の作ったポーションです。怪我をした人に配ってあげてください」

「まったく、レオ君はお人よしね。自分の体がふらふらなのに、怪我をした人の心配を優先するなんて」

「レオ君もしっかり休むんだよ。治療はお姉さんたちに任せていいからね」

ユリアさんとイリアさんは苦笑いしながら僕の頭を撫でてから、ポーションを持って怪我人のところに向かった。

まだまだ元気なシロちゃんは、冒険者のおじさんたちとともにゴブリンの解体と血抜きを始めた。

僕は防壁のところまで移動すると、同じく魔力が空っぽのモグちゃんを抱っこしながら眠ったのだった。

「うーん、うん？ ここは、どこだろう？」

「プイ？」

ソファァーから体を起こす。

首から提げている懐中時計型の魔導具は、もう少しでお昼になる時間を差していた。抱きしめていたモグちゃんも僕と同じタイミングで目を覚ます。

うーん、ここはどこだろう？

ユリアさんもイリアさんもシロちゃんも見当たらないよ。

とりあえず状況を確認しようと思い、僕はモグちゃんと一緒に部屋の外に出た。ガチャ。

扉を開けると、とても賑やかな声が聞こえてきた。

ここは、昨日ゴブリンを卸した冒険者ギルドだった。

誰かが、寝ちゃった僕のことを冒険者ギルドに運んでくれたんだね。

お腹が空いてしまったので魔法袋からパンを取り出し、モグちゃんと一緒に食べることにした。食べ終えてから、卸担当のおじさんがいるのが目に入ったので話しかけに行く。

「おじさん、こんにちは」

「プイ！」

「おお、レオか。顔色も良くなったみたいだな」

卸担当のおじさんは、ニカツとしながら僕とモグちゃんの頭をちよつと強めに撫でた。

「僕が寝ちゃったあと、どうなったんですか？」

「とりあえず、村の入口にあるゴブリンの死骸の山は数が多いから、守備隊の連中とまだ元気な冒

険者で後始末しているぞ。レオの連れてきているスライムも手伝ってくれてたな。レオと教会が持つていたポーションのお陰で重傷者もいない。ありがとな」

「みんなが無事ならよかったです」

僕はそう言つて、ユリアさんたちを探しに村の入口へ向かった。

「わあ、ゴブリンの死骸の数がものすごいよ！」

「プイプイ！」

村の入口の脇には、僕たちが倒した大量のゴブリンが山となって積み上がっていた。

ゴブリンを倒しているときは夢中でよくわかんなかったけど、こんなにたくさんいたんだ。

想像以上の光景に、僕とモグちゃんは思わずポカーンとしてしまった。

すると、ユリアさんとイリアさんが僕たちのところへ近付いてきた。

「レオ君、体は大丈夫かしら？ 顔色は良くなったみたいだけど……」

「いつの間にか壁に寄りかかって寝ていたから、私たちが冒険者ギルドに連れて行ったのよ」
「やっぱユリアさんとイリアさんが冒険者ギルドに連れて行ってくれたみたいですよ。」

というのも、ゴブリンの血がついたままだと、他の動物や魔物が近寄ってくる可能性があるの、安全な冒険者ギルドに僕とモグちゃんを預けたとのことでした。

そういえば、昨日はゴブリンの血の臭いにオオカミが引き寄せられてたもんね。

シロちゃんに目を向けると、ものすごい勢いでゴブリンを吸収していた。

その様子を見ていたら、守備隊の偉い人が僕に近付いてくる。

「レオ君には感謝を言わないといけない。無理をさせないと言いつつ、結局はレオ君の魔法の力に頼ってしまったのだから」

守備隊として、小さい僕に頼りきりになってしまったことを申し訳なく思っているようです。

でも、あのままではゴブリンが村をめちゃくちやにする可能性が高かったし、僕としては手伝ってよかったと思った。

「それで、もう一つ頼みたいんだが、レオ君が倒したゴブリンキングをコバルトブルーレイクの町にある冒険者ギルドに運んでくれないか？ この村では、ゴブリンキングを処理できる人員がいらないんだ」

「大丈夫ですよ」

ゴブリンキングを倒した分の報酬はそのまま僕が受け取っていいことになった。

モグちゃんとシロちゃんにもいっぱい手伝ってもらったので、美味しいものを買ってあげないとね。

僕は言われた通り、さっそく魔法袋に二匹のゴブリンキングをしまった。

「「おおー、すげー！」」

僕の近くでゴブリンを処理していた人たちから驚きの声が聞こえた。

その後は、僕もゴブリンの後片付けを手伝ったり、ゴブリンの血の臭いに引き寄せられたオオカ

ミを倒したりした。

夕方前にはすべての作業が終わり、僕たちが宿の食堂に向かうと、そこにはたくさんのごちそうが。

なんと、ゴブリンをいっぱい倒したお礼に、宿の人が料理を作ってくれたそう。

しかも、僕が主役だといって一番いい席に案内された。

それから冒険者のみんなと一緒に楽しい夕食の時間を過ごしたのだった。

翌朝、僕たちはコバルトブルーレイク直轄領への馬車便に乗るために準備を整えていた。

宿の食堂で朝食を食べていると、昨日のゴブリン襲撃と一緒に対処した筋肉ムキムキな冒険者の一行が食堂に姿を現した。

あれ？ よく見ると剣士の人が足を引きずっているよ。

僕が渡したポーシオンは配ってもらってはずだけど、それでも怪我が完治しなかったんだ。

僕はパンを食べ終えると、モグちゃんとシロちゃんとともに冒険者集団のところに向かった。

「おはようございます、昨日は色々ありがとうございました」

「プー！」

「ははは、助かったのは俺たちのほうだ。黒髪の魔術師という二つ名は伊達^{だて}じゃなかったな」
冒険者は、ニカッと笑いながら僕とモグちゃんの頭を撫でてくる。

次の瞬間、モグちゃんの頭の上に乗っていたシロちゃんもぞもぞと動き出した。シユイン、ぴかー！

「うお、これは回復魔法か？ 足の痛みがすっかり良くなっちゃったぞ！」

シロちゃんが足を引きずっていた剣士の人に回復魔法を使ったのだ。

もちろん剣士の人も驚いているけど、それより僕やモグちゃんのほうが衝撃を受けている。

シロちゃんってこんなこともできるの!?

シロちゃん曰く、昨日血抜きをたくさんしたら、成長して魔法が使えるようになったんだって。

僕がシロちゃんを褒めていると、奥にいた女性の冒険者の会話が耳に入った。

「そういえば、昨日レオ君がくれたポーションはとっても効果があったわ。コバルトブルーレイクの町で売っていたポーションは、あまり良くなかったわね」

「そうそう、レオ君の作ったポーションとは雲泥の差よね」

話題は、僕が渡したポーションについてだった。でも、ポーションって作り方が決まっているからそんなに効果が変わることはないと思うんだけど。

普通なら販売前に専用の魔導具で品質チェックもするはずだしね。

うーん、なんだか気になる話だね。

実際にコバルトブルーレイクの町に行ったときに、どんなポーションが売られているか確認しておいたほうがいいかな。

朝食を食べ終えて、僕たちが出発の準備を整えていると、守備隊の偉い人が宿の玄関から入ってきて、ニツコリとしながら僕に声をかけた。

「おはようございます。レオ君、改めて昨日は助かったよ。本当にありがとうね」

そして、守備隊の偉い人がユリアさんとイリアさんに手紙を一つ手渡す。

「ユリア殿、イリア殿、こちらの手紙を冒険者ギルドの受付にお渡しください。ゴブリン討伐に関する報酬について記載しております」

「たしかにお預かりしました。確実に渡します」

「色々ご配慮いただき、ありがとうございます」

ユリアさんが、受け取った手紙をバッグに大切にしまった。

「森の中にあるゴブリンの巣は、我々が責任もって対応するから後のことは安心してくれ。街道の安全もすぐに確保されるだろう」

コバルトブルーレイクの町から応援も来ていて、このあとさらに増員するという。

馬車便が安全に通行できるように、守備隊の人には頑張ってもらいたいです。

馬車乗り場に移動すると、多くの守備隊員と別の馬車便に乗る冒険者が見送りに駆けつけてくれた。

みんなにお別れを告げ、僕たちは馬車に乗った。

馬車が走り出すと、僕、モグちゃん、シロちゃんは、みんなの姿が見えなくなるまで車内の窓か

ら手を振ったのだった。

パカパカパカ。

「プイ、プイ、プイ！」

僕たちを乗せた馬車が、順調に街道を進んでいく。

今日は天気もいいし、風もとっても気持ちよかった。

モグちゃんは僕に抱っこされながら、気持ちよさそうに馬車から見える景色を眺めていた。

「シロちゃんが『森のざわめきがいぶ小さくなった』って言っているよ」

「そりゃそうだろうよ。あれだけの数のゴブリンを倒したんだから」

シロちゃんが触手をふりふりしながらそう教えてくれた内容を伝えると、一緒に乗っていた冒険者の一人が豪快に笑った。

村を出発して三時間が経った頃、ついに森を抜けて平原に出た。

目の前にとつても大きな湖が広がっている光景が目に入る。

これが領の名前の由来となった綺麗な青色の湖のコバルトブルーレイクだそうだ。

対岸が見えないくらいとにかく大きかった。

「わあー！ すごーい！ きれー！ おっきー！」

「プイ、プイ！」

町も湖からすぐ近くに見える位置にあり、湖のきらめきで輝いて見えた。

この綺麗ななら多くの人が訪れる観光都市っていうのもよくわかる。

モグちゃんもシロちゃんも馬車から身を乗り出して思わず大はしゃぎしていた。

「ふふ、レオ君が年頃の子どもみたいに喜んでるわ。とっても可愛いわね」

「レオ君たちにとっては珍しい光景だもんね」

ユリアさんとイリアさんが、僕たちの様子を見て微笑んだ。

そのまま町を守る防壁の門まで馬車は到着して、チェックを通過し終える。

領内の馬車乗り場に到着すると、冒険者のみなさんが声をかけてきた。

「よつと。俺たちはここまでだな。ははは、貴重な旅になったぞ」

「そうだな。俺たちの中に黒髪の魔術師と活躍した時間が加わったのだからな」

「それに実績も上がったし、いいこと尽くめだ。また一緒にやろうな」

馬車乗り場で馬車から降りると、アマード子爵領から一緒に旅をしていた冒険者のおじさんたちとお別れの挨拶をする。

旅の道中では助けられたこともあったし、色々と勉強にもなった。また、おじさんたちと一緒に旅を試してみたいなあ。

そういえば冒険者ギルドに行つて、ゴブリンキングを納品しないといけない。

それに、ユリアさんも守備隊の偉い人から手紙を預かっているもんね。

僕は、ユリアさんとイリアさんと手を繋いで冒険者ギルドに向かった。冒険者ギルドは、僕の足でも十分あれば着く距離だそうだ。僕たちは町中をきよきよと見ながら歩き始める。

「わあ、市場にたくさんのお魚が売っています！」

「プイ！」

「コバルトブルーレイクは、色々な種類の魚が獲れるからね。せっかくだから、昼食は冒険者ギルドの食堂にしましょう。魚料理が名物なのよ」

ユリアさんがニコリとしながらそう教えてくれた。

料理の話を聞いたせいで、なんだかお腹が空いてきちゃった。

それから少し歩いて、無事にコバルトブルーレイクの町の冒険者ギルドに到着です。

うーん、アマード子爵領の冒険者ギルドとだいたい同じくらいの大きさだ。

ギルドの中に入ると、お昼前のタイミングだからか冒険者の数が少なかった。

そんな中、ユリアさんとイリアさんが冒険者ギルドの受付をキョロキョロと見回していた。

「あっ、いたいた。ちょうど受付に知り合いがいるのよ。そこにしましょう」

イリアさんがキョロキョロしていた理由を教えてください。

向かう先にいたのは、青色のおかつぱ頭でとても人懐っこい感じのお姉さんだった。

ユリアさんとイリアさんは、慣れた感じで受付のお姉さんに話しかける。

「マナ、久しぶり」

「久しぶりね」

「ユリア、イリア、久しぶりね……って、それどころじゃないわよ。近くの村でゴブリンの襲撃があったって聞いたけど、大丈夫だったの？ 怪我はないの？」

ユリアさんとイリアさんが話しかけた受付のお姉さんが大慌てし出した。

二人が受付のお姉さんを宥めて、なんとか落ち着いてもらう。

そして、ユリアさんが守備隊の偉い人から預かった手紙をごそごとバッグから取り出して、受付のお姉さんに手渡した。

「はい、これが村の守備隊から預かったギルドマスター宛の手紙よ。レオ君がいなかったらゴブリンキングによって村ごと全滅していたわ。さすがは黒髪の魔術師って言われるだけあるわ」

「へっ、ギルマス宛の手紙？ それに黒髪の魔術師って!？」

受付のお姉さんは、手紙を受け取りながら今度は僕のことをまじまじと見ていた。

そして目をぱちくりしていると、急に大声で叫ぶ。

「えー！ この子が黒髪の魔術師!? あっ、本当だ。髪の色が真っ黒だ！」

受付のお姉さんがまたしてもワタワタし始めちゃった。

どうも、件の黒髪の魔術師って言われる僕が目の前にいることに興奮しているみたいだ。

そんな受付のお姉さんの慌てぶりに、ユリアさんとイリアさんは思わず苦笑するばかりだった。

バシッ!

「あたっ!」

「マナ、ちよっと落ち着きましようね」

ここで、受付の奥から別のお姉さんが窓口に向かってきて、マナさんの頭をげんこつでぐりぐりとしていた。

とつても若く、金髪のウェーブのかかったふわふわのロングヘアだった。穏やかでちよっとポヤポヤした感じなのだけど、今まで会った女性の中では断トツでスタイル抜群だった。

「い、痛た、痛た! ギルドマスター、力入れすぎですよー」

「ふふ、そこまでしないとマナちゃんを止められないって思ったのよ。レオ君、騒々しくてごめんね」

えー! この金髪のお姉さんが、コバルトブルーレイク直轄領のギルドマスターなの!?

今までのギルドマスターはいかにもって感じの冒険者だったから、とつてもビックリしちゃったよ。

そんなギルドマスターさんが手紙を読みながらふむふむと頷く。

「例のゴブリンキングの件ね。守備隊から話は聞いているから、もう受け入れ準備をしているわ。

ゴブリンキングはとつても大きいから、直接倉庫に行きましようね」

ギルドマスターが僕たちを案内するように先陣を切って歩き出したので、僕たちも急いでギルド

マスターのあとをついていった。

やってきたのは買取ブースの奥で、とても広いスペースができていた。

このスペースには買い取ったものが腐敗しないように、冷たい空気が出る魔導具が設置してあった。さらには、冷凍魔導具というものを凍らせる魔導具も設置してあった。

数人の解体担当の職員が僕たちのことを待っていた。

「みんな、お待たせね。レオ君が来てくれたわ」

「おう、ギルドマスター待っていたぜ。その坊主が、例の黒髪 of 魔術師か。こっちに出してくれや」

解体担当の職員はニヤリとしながら、ギルドマスターに声をかける。

そして、僕は解体担当の職員に指示された場所に、魔法袋から二匹のゴブリンキングを取り出して置いた。

シュツ、どーん。

「「おー!」」

「うんうん、紛れもなくゴブリンキングだわ。しかも、血抜きもバッチリね」

「こりゃ、解体のやり甲斐があるな。久々に腕が鳴るぜ」

解体担当の人たちは急ぎの仕事がないそうなので、さっそくゴブリンキングの解体作業を行うと言ってくれた。

僕たちの用事はこれで終わったので、再び受付に戻ります。

「ゴプリンキングの状態がともいいから査定額もアップできるわ。報奨金とあわせて支払うから、もう少しだけ待っていてね」

ギルドマスターが支払いについてそう話してくれました。

「僕は急ぎでお金を必要としないので、いつでも大丈夫です」

「うんうん、レオ君はいい子ね」

ギルドマスターに頭を撫でられて、なんだかちよつと照れ臭い気持ちになった。

そんな風にちよつとほのぼのしていたら、冒険者ギルドにかなり慌てた様子で誰かが駆け込んできた。

「あの、教会から冒険者ギルドに黒髪の天使様がいるとお聞きしました。」

はあはあと息を切らせながら受付に姿を現したのは、侍従らしい服を着た若い使用人だった。

これだけ慌てているとなると、何か事件でもあったのかな？

ギルドマスターが慌てている使用人を落ち着かせるように優しく話しかける。

「落ち着いてくださいね。ちよつどあなたの目の前にいるのが、かの有名な黒髪の天使様ですよ」

「ああ、なんとという幸運なのでしょう。神に感謝いたします。教会に行つて病気の治療を相談したら、守備隊から黒髪の天使様がこの町に到着したと連絡があったと言われました」

うん？ 病気？

急を要する内容だと察したギルドマスターが、その言葉で素早く動き始めた。

「では、緊急の指名依頼の手続きをしましょう。治療が必要な方がいるのは、どこのお屋敷ですか？」

「場所はマリアージュ侯爵家の別荘ですが、診^みていただきたいのはフランソワーズ公爵家ご令嬢のクリステイヌ様でございます」

コバルトブルーレイク直轄領には貴族の別荘がたくさんあるって聞いたけど、いきなり貴族からの指名依頼が入ることになるとは。

でも病気となれば貴族でも平民でも関係ないし、苦しんでいるなら助けてあげないと。

「フランソワーズ公爵家が絡んでいるとなると、ギルドマスターの私も同席したほうがいいですね。ユリアちゃんとイリアちゃんも、私と一緒に来てね」

ギルドマスターは、コバルトブルーレイクの町で初めての依頼をする僕に気を遣ってくれたみたいだった。

僕がギルドマスターに視線を向けるとパチリとウインクをしてから、フランソワーズ公爵家はとてもいい貴族だから安心するようにと耳打ちで話してくれた。

受付のお姉さんに臨時依頼の受付をしてもらい冒険者ギルドの外に出ると、ギルドの前にドーンと大きな馬車が停まっていた。

立ち読みサンプル
はここまで

アマード子爵家の馬車よりも大きくて、僕は思わずびっくりしてしまふ。馬車に乗ると、これまた車内の広さに驚く。

モグちゃんとシロちゃんが、馬車の中をキョロキョロと見回した。

そして馬車が、貴族の別荘が集まっているエリアに向けて出発する。パカパカパカ。

「すみません。治療の参考にしたいので、症状の詳細を教えてくださいませんか？」

「はい、もちろんでございます。クリステイヌ様はまだ三歳になられたばかりで、別荘に到着する際に微熱を出したのです。それから熱を治そうとこの町で売られているポーションを購入したのですが、お飲みになられた途端、急に顔色が悪くなられて……」

あれ？ 話を聞いた限り、どちらかという問題なのは、微熱というより、その後顔色が悪くなったことにありそうだ。

前の村で、冒険者も話をしていたけど、やっぱりこの町のポーションは何かおかしいのかな。

ギルドマスターも、この話を聞いてうんって唸^{うな}っちゃったよ。

使用人さんに色々教えてもらっているうちに、とても豪華な別荘が立ち並ぶ湖畔^{湖畔}のエリアに入った。

屋敷みたいな建物がたくさん並んでいて、その中でも一際豪華な屋敷の前に馬車が停まった。

「皆様、到着しました」

「ええ、ありがとうございます。急ぎましよう」

こんな大きな別荘に泊まっているなんて、きっとすごい貴族なんだろうね。

僕たちは、ギルドマスターを先頭に馬車を降りると急いで大きな別荘の中に入った。

すると、玄関でとても品の良さそうな中年男性が今か今かとそわそわしながら待っていた。

「ただいま戻りました。ギルドマスターと黒髪の天使様が来られました」

「そうかそうか。ささ、こちらに来てくれ」

使用人とともに中年男性が別荘の中を進んで、僕たちを先導してくれた。

奥まで行くと、男性が部屋のドアを開ける。

室内はとても広く、壁際に置かれているベッドでは小さな女の子が苦しそうな息をしながら寝ていた。とても綺麗な桃色の髪を肩あたりまで伸ばしている少女だ。

「はあ、はあ、はあ……」

「どうか、どうかクリスを助けてやってくれ……」

もう中年男性は涙目で、僕に訴えかけるように言った。

僕は一つ頷き、すぐにベッドに駆け寄った。

女の子はとても顔色が悪そうだった。それにしても、この症状ってどこかで見た覚えがあるよ。「すみませんこの子の症状を確認するために、鑑定魔法を使ってもいいですか？」

「おお、構わないぞ。やってくれ」